

平成17年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 サワラ

学名 *Scomberomorus niphonius*

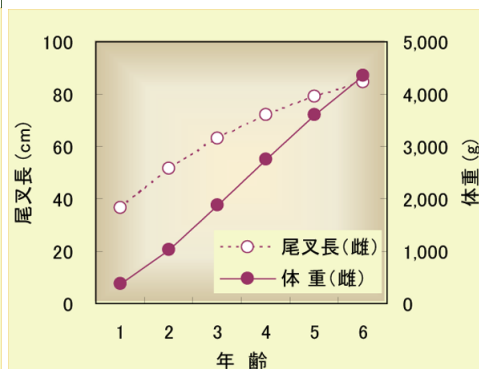
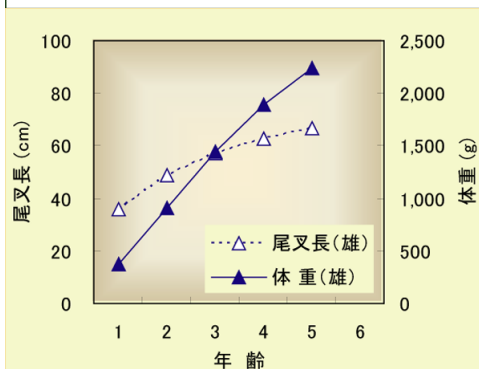
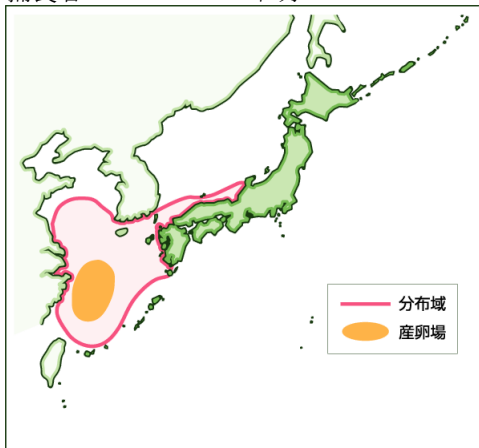
系群名 東シナ海系群

担当水研 西海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 約6歳
成熟開始年齢: 1歳(一部)、2歳(大部分)
産卵期・産卵場: 5～6月に産卵、産卵場は東シナ海の中央部～中国沿岸
索餌期・索餌場: 夏～秋季、黄海・渤海、日本海など
食性: 稚魚期以降に魚食性
捕食者: 不明

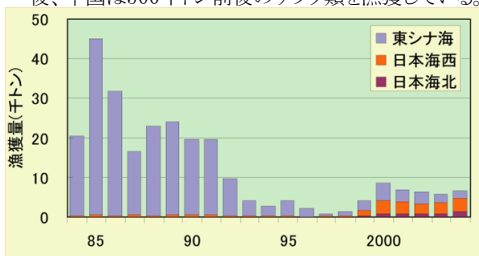


漁業の特徴

東シナ海、日本海に生息するサワラは主に大中型まき網、定置網および曳縄などにより漁獲される。大中型まき網のサワラの漁期は12月～翌年4月の冬季であり、12月に済州島西沖で漁獲され始め、徐々に漁場が南へ移り、東シナ海中央部および対馬海峡で漁獲される。1998年以降、日本海におけるサワラの漁獲量が増加している。また、中国漁船が漁獲したものの一部が日本へ輸出されている。

漁獲の動向

漁獲量は1984～1991年は20千トン前後で推移していたが、1992年以降減少して10千トンを下回る年が続き、1997年には822トンまで落ち込んだ。1998年以降、若齢魚を主体にして漁獲量が増加し、2000年には8,548トンとなったが、再び減少傾向となり、2003年には5,689トン、2004年には6,677トンであった。2000年以降、韓国は25千トン前後、中国は500千トン前後のサワラ類を漁獲している。

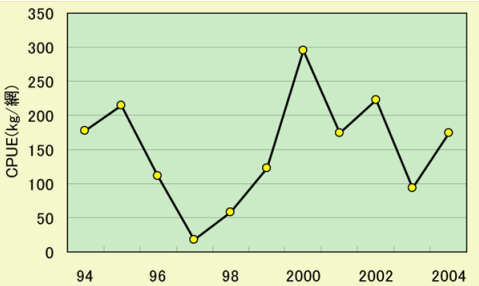


資源評価法

韓国と中国による漁獲量が日本よりもはるかに多く、韓国と中国の漁獲物の内容が分からない状況で、日本の漁獲データだけを用いてコホート解析などにより資源量を推定するのは適当ではないと判断した。そこで、日本と韓国の漁獲量と東シナ海で操業する大中型まき網のCPUE(漁獲量/有効努力量)を基に、資源水準と動向を判断した。

資源状態

日本と韓国の漁獲量の推移を見ると、過去20年間に於いて漁獲量の水準は中位にある。日本の漁獲量、韓国の漁獲量および大中型まき網のCPUEの相乗平均値を資源量指標値とし、その値の1994年以降の経年変化をみると、1997年まで減少し続けた後、1998～2000年は増加傾向にあったが、2001年以降は再び減少傾向に転じた。したがって、資源水準は中位、動向は減少傾向と判断した。



管理方策

資源水準は中位、動向は減少傾向であり、若齢魚中心の漁獲が続いていることから、漁獲圧を下げて資源の回復を図る必要がある。韓国と中国の漁獲量が日本よりもはるかに多いなかで、日本だけが資源管理を行っても効果が薄い可能性はある。しかし、日中韓の3国による資源管理体制が構築されるまでは、我が国海域への来遊量経年傾向に合わせて漁獲量を下げることが適当と判断した。来遊量指標値は日本の漁獲量と大中型まき網のCPUEの相乗平均値とした。

	2006年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	5,000トン	0.75C2004	-	-
ABCTarget	4,000トン	0.60C2004	-	-

資源評価のまとめ

- 韓国と中国の漁獲量が日本よりもはるかに多いため、日本の漁獲データだけでは東シナ海のサワラの資源量の推定は困難
- 日本と韓国の漁獲量の水準は過去20年において中位
- 資源量指標値は1997年に最低となった後、1998～2000年に増加したが、2001年以降は再び減少傾向
- 1kg以下の若齢魚が漁獲物の大半を占める

管理方策のまとめ

- 来遊量の経年傾向に合わせて漁獲量を下げ、資源の回復を図る
- 日中韓の3国による国際的な資源評価、管理体制の構築が急務

資源評価は毎年更新されます。